二人のビーストテイマー～インフィニティ・モーメント＆ホロウ・フラグメントVer～

ほにゃー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

血盟騎士団団長〝ピースクリフ〟

彼の正体は、ＳＡＯの開発者にして、ＳＡＯを死のゲームへと変えた存在、茅場明彦だった。

７５層のボス戦後、その正体を看破したキリトは、レインと共に、全プレイヤーのログアウトを賭けた、茅場と決闘を行った。

見事、茅場を倒した二人だったが、ログアウトの兆しが一向に見えないことに不安を覚え始める。

仕方なく、レインたちは先に進むことにした。

７６層”アークソフィア”へと……

目次

終わらないデスゲーム ―― 1
募る不安 ―― 9
妹との再会と鍛冶屋の少女 ―― 14
妖精との出会い ―― 26
落ちてくる少女 ―― 35
新たな仲間 ―― 45
76層ボス戦 ―― 51
《射撃》スキル ―― 64

終わらないデスゲーム

「一つ頼みがある」
　キリトさんが茅場に声を掛けた。
「何かな？」
「簡単に負けるつもりはないが、もし俺が死んだら、暫くでいい。アスナが自殺できないように計らってほしい」
　キリトさんの頼みに茅場は意外そうな顔をするが、頷いた。
「よかろう、彼女は《セルムブルク》から出られないようにしよう」
「キリト君！・駄目だよ！・そんなの、そんなのってないよ！」
　アスナさんの悲痛な叫びが聞こえる。
「レイン君、君はいいのかね？」
　茅場の言葉に俺はシリカの方を向く。
　シリカは不安そうに俺を見ていた。
　そんなシリカに俺は微笑んだ。
　それに安心したのかシリカの顔から不安は消えた。

「向うで会う約束をしたんです。そんな死んだらなんて話しませんよ」
「そうか」
茅場は笑い、左手を動かし、不死属性を解除し、十字剣を抜いた。
そして、互いに構える。
自然と持っている剣に力が籠る。
そして、とうとう動き出した。
キリトさんが絶叫を上げ、斬り込む。
キリトさんの一撃を茅場は十字盾で防ぎ、キリトさんに剣を振り下ろす。
それをキリトさんは体を仰け反らせて回避する。
そこに、俺が大太刀を振りかぶり斬り込む。
それを十字剣で防ぎ、十字盾で攻撃を仕掛けてくる。
剣を振った時の力を殺さず、その力を利用して盾の攻撃を躱す。
そこにキリトさんが二本の剣での連撃を浴びせる。
ソードスキルは全て茅場がデザインしたもの。
なら、全ての連続技がどこにどうくるのかも知っている。
だから、自分の技量のみで戦うしかない。
それにしても、子供とはいえ、二対一で互角に渡り合うとは茅場自身のスペックも凄

い。
茅場に感心しながらも攻撃の手を止めない。
腰を落とし、剣先を茅場に向け、突きを放つ。
茅場はそれを躱し、十字盾を下から突き上げ俺の顎にぶつける。
「ぐあっ！」
その攻撃に俺は吹き飛び、転がる。
「レイン！……くそぉぉぉ！」
そこで、キリトさんがソードスキルを使ってしまった。
二刀流最上位剣技《ジ・イクリプス》
連続二十七連撃を繰り出す技だ。
その時、茅場が笑った。
キリトさんは怒りに任せてソードスキルを使ってしまった。
もう、止まらない。
上下左右から繰り出される斬撃を茅場はいともたやすく防ぎきる。
最後の一撃を十字盾で受け流され、キリトさんはソードスキル発動後の硬直に入った。
「さらばだ、キリト君」

茅場の無慈悲の声が響く。
剣を握り走る。
だが、間に合わない。
キリトさんが死ぬ。

その時、不思議なことが起きた。
突如、動きが止ったかの様に、茅場は攻撃の手を止めた。
時間にして、一秒あるかないかの時間。
だが、それだけで十分だった。

既に、茅場を俺の大太刀の間合いに入れ、俺は突きを放つ。
茅場を大きく後ろに後退させ、斬りかかる。
茅場の顔から徐々に焦りが見え始め、茅場に余裕の文字が無くなっていた。
「レイン！スイッチ！」
後ろから、硬直が解けたキリトさんが突っ込んでくる。
茅場の剣を大きく弾き、後ろに下がる。
それと同時に、キリトさんは二刀流で連撃を浴びせる。
……おかしい。
こうして茅場を圧倒出来ているのはいいが、おかしい。
さっきまで、俺とキリトさんの二人掛かりを軽くあしらい、圧倒的な強さを見せていた茅場が、突然押され始めるなんておかし過ぎる。
まるで、圧倒されてるっていうより、上手く動けなくなっているって感じだ。
だが、今はそんなことは後回しだ。
直ぐに俺も加勢加わり、茅場を戦う。
そして、俺とキリトさんは同時に、茅場の十字剣と十字盾を弾く
守りが崩れた。
そして、俺の大太刀とキリトさんの剣が同時に茅場の胸を貫いた。

その瞬間だった。
ノイズのようなものが、俺たちの周りに走った。
そして、次の瞬間には、俺たちの前から茅場の姿は消えていた。
「終わ……ったのか？」
キリトさんがそう呟くのが聞こえた。
正直、本当に倒せたのか自信がない。
アバターが砕け散る音は聞こえなかった。
でも、本当に聞こえなかったのかと言われると自信がない。
倒すことに必死で、聞き逃したのかもしれない。
そんなことを考えていると、何かが勢い良く俺に抱き着いてきた。
シリカだった。
今にも泣きだしそうな表情で、俺を抱きしめていた。
「シリカ……」
「バカ……心配したんだからね……！」
「……悪い。でも、約束は守ったぞ」
「そんなの結果だもん」
やれやれ、これは機嫌が治るまで時間が掛かりそうだな。

「レイン！」
すると今度は、アヤメさんが走ってやって来た。
「この野郎！無茶しやがって！お前は、どれだけ人に心配かけさせんだよ！」
「まぁまぁ、落ち着けって」
そんなアヤメさんを落ち着かせたのはアルブスだった。
「レイン、言いたいことは色々あるが、とりあえず、お疲れさんだ。よくやったな」
「ああ、借りを返してもらうまでは死なないさ」
そう言って、アルブスと軽く拳を合わせる。
他の攻略組のプレイヤーも、茅場を倒したことに歓声を上げていた。
そっか……俺達、本当に勝てたんだな……
そう実感していると、ふとクラインさんが、言葉を発した。
「……所でよ、俺たちはいつ現実世界に帰れるんだ？」
その言葉に、また周りがざわつく。
ボスであり、このデスゲームを開始した茅場は倒した。
なのに一向に、ログアウトされる気配はない。
「まさか、嘘だったのか？」
「ヒースクリフ……茅場晶彦は自分を倒せばゲームはクリアされて全プレイヤーが自分

を倒せば解放されると間違いなく宣言した。茅場が嘘を言っている様子もなかった」
キリトさんの言う通り、茅場がこんな処で嘘をつくような人間とは思えない。
それなのにどうして……
「おい！７６層への扉が開いたぞ！」
すると、部屋の奥の様子をうかがっていたエギルさんがそう言ってきた。
「キリトさん……どうします？」
「……ゲームが終わらない以上、今は先に進むしかなさそうだ。行こう、７６層へ」
俺たちはその言葉に頷き、７６層に続く階段へと向かった……

募る不安

階段を上がり、７６層の扉をくぐると、俺たちが最初に見たのは草原だった。
そして、その先には７６層の主街区と思われる街の門がある。
「ここが７６層か……７５層の階段を上がったらログアウトできるかもって、ちょっと期待してたんだけどな……」
「メニュー画面のログアウトの文字も、変わらず使用不能だな」
アルブスがメニュー画面のログアウトボタンをタップしながら落胆する。
アルブスだけじゃない、他の攻略組プレイヤーも落胆している。
「いや、問題はログアウトが未だにできないこともだが、それ以上に、もっとやばい問題があるぞ」
アヤメさんがそう言って、自身の槍を見つめる。
「どうしたんですか？」
「俺の槍、アイテム名が文字化けしてるんだ」
「え？」
「それどころか、性能もランクダウンしてる。攻略するにあたって支障はないだろうが、

厄介だ」

まさかと思い、俺も自分の大太刀を調べると、《大■刀・白＿秋水―龍―》となっていた。

性能もだ。

《エクソロサイス》よりいい性能だったのが、今じゃ《エクソロサイス》と同等になっている。

更に《エクソロサイス》も文字化けし、性能が下がってる。

「そんな……こんなことって……」

「大変なのはそれだけじゃないみたいだ」

すると、キリトさんが神妙な面持ちで、やってくる。

「スキルを見てみろ」

「スキル？……ってなんじゃこりゃ!?」

クラインさんが声を上げる。

それもそうだ。

何故なら、俺たちが二年と言う時間をかけて鍛え上げたスキルは、軒並み下がっていたり、いくつかロストしてるのがあった。

「俺が必死に鍛え上げたスキルが……！」

「おい！転移結晶の方にも問題が発生だ！下の層に転移が出来なくなってる！」
「なんだって!?」
「で、でも！転移が出来なくても、直接階段使って降りれば……！」
「無理だ。そもそも、転移結晶の不具合が見つかったのも、７５層のボス部屋の扉が一向に開かないのに不安を感じて、使ったのが始まりだ」
「そんな……！ねぐらに色々置いてきちまったのに、取りに戻れねぇじゃねーかよ、チクショー！」
　クラインさんはそう叫ぶと、座り込む。
　徐々に攻略組内にも不安が広がり、全員が騒ぎ出す。
　そんな時だった。
「皆、聞いてくれ！」
　声を上げたのは、キリトさんだった。
「スキルの消失や、ログアウトの不可、アイテムの性能ダウンだったりと不安はあるかもしれないが、このまま待っても事態は好転しない。むしろ、これ以上厄介な不具合が起きる前に、前へ進むべきだ！」
「で、でも、まだ後２４層もあるんだぞ……」
「確かに、まだ２４層ある。だが、俺たちはこのゲームの管理者だったヒースクリフ、茅

場昌彦を倒した。あとは、システムが動かしてるモンスターだけだ。そいつらよりも、茅場は何倍も強かった！俺達なら、残り２４層も攻略できる！」

「……そうだよな。このままただ落ち込んでるより、ぞっちの方が何倍もマシだな！」

キリトさんの言葉に、クラインさんも立ち上がる。

「ま、キリトに賛成だな。幸い、レベルは無事なんだ。スキルを鍛えるのは大変かもしれんが、攻略する分にはまだマシな方だろ」

アヤメさんも、槍を装備し直し笑う。

「とりあえずは、転移門のアクティベートだな。さっさと行こうぜ」

アルブスはそう言い、主街区へと向かう。

その後に、他の攻略組も主街区へと向かい、徐々に人が居なくなる。

「はぁ～、ログアウトできると思ったのにな」

俺は頭を掻いて、溜息をもらす。

「仕方ないよ。でも。レインが無事で、本当に良かった」

隣にいたシリカが、俺の手を握ってそう言ってくる。

「でもさ……シリカを現実世界に帰してやれるって思ってたのに……ごめん」

「何謝ってるのさ」

そう言って、シリカはいつもの笑顔で言う。

「確かに、まだ帰れないってのは悲しいけどさ。でも、まだこうしてレインと一緒に居られる。それが、なんだが嬉しいなって思っちゃうんだ」
「シリカ……」
「ほら！早く街に行って、装備とかアイテムの補充とか色々しないと！」
「……ああ、そうだな」
お互いに手を繋いだまま歩き出し、主街区へと向かう。
色々不安もあるが、とりあえず今は、目の前のことに集中するか……

妹との再会と鍛冶屋の少女

７６層《アークソフィア》

「キリト、転移門のアクティベートは済んだぞ」

「試してみたが、ここには転移が出来るみたいだ」

アルブスとアヤメさんがやってきて、キリトさんに報告をする。

「そうか。もしかすると、７５層以下の階層のアクティベート情報が消失したのかもしれないな」

「なら、この先以降のアクティベートした場所なら、また転移が使えるってことですね」

「恐らくな」

「一応これから先、新しい階層が解放されるたびに調べた方がいいかもしれないがな」

「とりあえず、俺は武器のメンテしてくる。ＮＰＣの鍛冶屋だから、あまり期待はできないけどな」

アルブスはそう言って鍛冶屋がある通りへと向かう。

向かう途中「ＮＰＣの店でメンテしたって言ったら、怒るだろうなぁ……」とボヤいていた。

「俺も、知り合いたちと情報交換してくる。それに、下層にも情報を流さないといけないしな」
「ああ、頼むよ、アヤメ」
「任せとけ」
キリトさんに手を振り、アヤメさんも移動する。
そう言えば、キリトさんとアヤメさんって結構仲いいよな。
「キリトさんってアヤメさんと仲いいんですか？」
「ああ、まぁな。一時期、一緒に組んでたこともあるぞ。その時、同い年って知ってさ。それから、なんかお互い砕けた態度でいる感じだ」
ちょっと意外だった。
まさか、キリトさんとアヤメさんが組んでいたなんて。
「ちょっと、キリト君。その話、私初耳なんだけど？」
「え？いや、別に話すほどじゃないと思って……アスナ、もしかして怒ってる？」
「怒ってないわよ！」
「いや、怒ってるじゃん！」
キリトさんとアスナさんが、痴話喧嘩を始めたので、俺はシリカを促し、その場を離れる。

「なんて言うか、そこまで怒るほどかな？」
何気なく、先程の出来事をシリカに尋ねる。
「怒るに決まってるでしょ？」
「そう言うものなのか？」
「そうなの！女の子ってのは、自分の好きな人のことは何でも知っておきたいものなの！」
「何でもか……でも、男としては好きな相手でも、知って欲しくないこととかもあるんだがな」
こう言う所は、やっぱり男と女は分かり合えないんだな。
そんなことを思ってると、俺の肩にいたフィーと、シリカの肩にいたピナが急に鳴き声を上げて、どこかへと向かった。
「あ！フィー！」
「ちょっ！ピナ！」
慌てて、二匹を追いかけると、二匹は入り組んだ路地を抜け、袋小路に辿り着いた。
「ピナ、急にどうしたの？」
「フィーも、いきなり飛び出すなよ」
二匹を抱えるように抱き上げ、辺りを見渡す。

特に何かあるようには見えないな。
「とにかく、戻ろう」
来た道を引き返そうとした瞬間、突然、行き止まりとなってる先で眩い光が起きた。
「な、何これ!?」
「シリカ!」
咄嗟に、シリカを庇い、しゃがむ。
光は大きくなり、俺たちを包み込む。
何秒がそうして、恐る恐る目を開けると、光は収まり、辺りは何も変わらない風景だった。
「今のは一体……」
「れ、レイン……」
「どうした、シリカ?」
シリカが口を振るわせて、指をさす。
その先には、一人の少女が居た。
その少女を、俺とシリカは知ってる。
《笑う棺桶(ラフィン・コフィン)》討伐作戦の、あの日、この世界から消えた、俺とシリカの妹、ユウナだ。
「ユウナ……」

久しぶりに口にする、彼女の名前を呼ぶ。
少女は、その声に反応して、ゆっくりと目を開けて、こちらを見る。
「……お兄……ちゃん？」
ユウナは、俺を見て、次にシリカを見る。
「お姉ちゃん……？」
「ユウナ（ちゃん）!!」
「お兄ちゃん！お姉ちゃん！」
俺とシリカはユウナに駆け寄り、ユウナも俺たちに向かって駆け寄り、飛びついてくる。
「本当に、本当にユウナなんだな！」
「ユウナちゃん、会いたかったよ……！」
「私も……私も会いたかったよ、お姉ちゃん！お兄ちゃん！」

　再開を終えた俺たちは、ひとまず落ち着くために路地裏を出て、近くのベンチに座る。
「それで、ユウナはどうしてここに？」
「確か……死んじゃったんだよね？」
「うん、そのはずなんだけど……なんか暗闇で誰かに声をかけられて、気が付いたらあそこに居たの」
「これもバグなのか？」
「でも、一度死んだはずの人が、蘇るバグなんてあるの？」
　実はユウナは死んでおらず、なんらかのバグで一時的に意識が何処かに飛んでいたってのか自然だが、それはなんか違う気がする。
「でも、あの時聞こえた声、凄く温かくて優しい声だったな～。フィーとピナと一緒に寝てる気分だったよ、えへへ」
　……ま、いっか。
「どんな事情があるにせよ、またこうしてユウナと一緒に居られるんだからな」
　ユウナの頭を撫でて、俺はシリカを見る。
「うん、そうだね」

「だね！」
ユウナも元気にそう返事を死、俺とシリカは自然と笑みになる。
とりあえず、キリトさんに今回のことを報告するために、もう一度転移門広場に向かう。
すると、そこにはユイちゃんが居た。
「キリトさん、その子って……」
「ああ、ユイだ。実はな」
キリトさんからの説明によると、今、ＳＡＯの制御を行ってるカーディナルシステムが、今このＳＡＯに起きている予期せぬ事態の処理に追われており、処理速度の大半をそれの処理に使っているため、エラー訂正機能の低下により、システムから切り離したユイちゃんのプログラムが、こうして活動できる様になったらしい。
「それで、その子は誰なんだ？」
「キリトさん、そのことで俺も話が」
俺は余すことなく、キリトさんにユウナのことを話した。
《メディキュボイド》のこと、そして、ユウナが亡くなったこと。
全てを伝え終わると、キリトさんは何か考え始めて、口を開く。
「確かに、医療用に開発されたナーヴギア、《メディキュボイド》の話は聞いたことがあ

る。だが、どうしてユウナちゃんがＳＡＯに来たのかはわからない。それに、一度死んだはずのプレイヤーが、蘇るなんて信じられない」
「でも、俺もシリカも、ユウナが亡くなるのを見ていたんです。それに、ユウナが嘘をついていたとも思えないんです」
「……ま、ひとまずこの問題は置いておくことにしよう。それに」
　そう言ってキリトさんは、ユイちゃんと遊んでいるユウナを見る。
「あんなに楽しそうにしてるんだ。今は、それだけで十分だろ？」
「まぁ、そうですね」
　楽しそうにしてる二人を眺め、俺もそう答える。
「おーい、キリト」
「お、アヤメ。情報の方はどうだ？」
　アヤメさんが戻ってきて、キリトさんに声を掛ける。
「ああ。さっきアルゴに情報を送った。これで、これ以上下層からここに来るプレイヤーは抑えられるだろう」
「７６層が解放されたことで、観光に来る中層プレイヤーもいるからな。ともかく、これ以上被害を押さるようにしないとな」
「おーい！みんなー！」

すると、聞き覚えのある声が聞こえ、俺たちはそっちを振り向く。
そこにはリズさんが居た。
「り、リズ!?」
「良かった〜!みんな無事だったのね!あ、ところでアルブスの奴は何処?まさか、NPCの鍛冶屋に武器をメンテなんかさせてないわよね」
「リズ、どうして来ちゃったの!?」
「ど、どうしてって、随分な言い草ね!こっちは心配で見に来たって言うのに!」
「情報は聞いてないのか!?」
「情報?なんの?」
どうやら、情報が流れる前に来た感じだな。
アスナさんはリズさんが来てしまったことに取り乱し、キリトさんも頭を抱えていた。
「アヤメ、悪いけどアルブスの奴を呼んできてくれ……」
「もうやってる……」
数分後、アルブスが息を切らせながらやってきた。
「リズ!お前、どうして来たんだよ!?」
「ちょっ、アスナもアンタもなんでそう言うこと言うのよ!アンタたちが心配で様子を

見に来たって言うのに！」
「それは素直に嬉しいが……はぁ～」
　アルブスは溜息を吐き、リズさんに説明をした。
「いいか、リズ。７６層に来た以上、もう７５層以下には戻れない」
「……え？」
　アルブスの言葉に、リズさんは固まった。
「じょ、冗談よね？」
「事実だ。転移門からの転移も、転移結晶での転移も、階段を使って直接下層に降りることも無理だ。それに、スキルの方にも変化が出る」
「え？……そ、そんな!?鍛冶スキルが全部下がってる!?片手棍スキルも!?」
　自分のステータスを見て、更に驚くリズさん。
「そ、そんな……私の店が……私のスキルが……」
　とうとう崩れ落ちて織り込むリズさんに、アルブスが近づく。
「そう落ち込むな、リズ。スキルと店は残念だが、ここは最前線だ」
「……それがなによ？」
「７５層以下に転移が出来ない以上、ここには攻略組が留まることになる。そうなったら、俺たちはＮＰＣの店で武器のメンテや強化をしないといけない。だが、お前が居れ

ばメンテも強化もお前がやることになる。それは、お前にとってもいいことになるんじゃないか？」
「……言われてみれば、そうね」
「だろ？それに、上層なら下層ではドロップしないレア金属や素材も手に入る。いいこと尽くめだろ？」
「……それもそうね。そもそも、攻略組が帰って来られない以上、私の方も商売あがったりよね。こうなった以上、前向きに考えるわ！」
「それでこそリズだな。それに、下がったり、消えちまったスキルのスキル上げなら手伝ってやるよ」
「本当!?ありがとう、アルブス！」
「これぐらい当たり前だろ。とにかく、さっさとスキル上げて、俺の刀のメンテを頼むぞ」
「ええ、もちろん！任せておきなさい！」
　リズさんは笑顔になって、アルブスの手を取る。
「それじゃあ早速！《リズペット武具店　二号店》のための、空き物件探しから手伝ってよね！」
「お、おい！引っ張るなって！」

アルブスは、そのままリズさんに引っ張られる形で連れてかれる。
その様子を見て、俺たちは笑っていた。
早く付き合わねぇかな、あの二人……

妖精との出会い

アークソフィアに来て、一週間が経過した。
一週間もたてば情報は完全に広まり、アークソフィアに来るプレイヤーはいなくなった。
現在、アークソフィアにいるのは、攻略組のプレイヤーと、解放初日に誤って来てしまった中層プレイヤーぐらいだ。
「せいっ！」
そんなことを思いつつ、俺は手にした両手剣を振り、目の前のモンスターを倒す。
「シリカ、スイッチ！」
「はいっ！」
シリカとのスイッチが決まり、モンスターを倒す。
「うーん、やっぱ武器が弱くなったのは困りものだな」
手にした両手剣、《エクソロサイス》を持ち上げて俺は言う。
「スキルの方もだけど、当面の問題は武器かもね」
シリカも自身の短剣、《エンシェントクリス》を見つめて言う。

「スキルは地道に戦ってあげるしかないけど、武器ならドロップやオーダーメイトで作ってもらえば何とかなる。けど、武器が作れるのは、この層だとリズさんだけ。そのリズさんも鍛冶スキルは大半をロストしてるか下がってる状態。となると、ドロップ品だけが当分の目当てになるか」
「まぁ、性能が下がっていても戦えるだけマシだよね」
「だな」
剣を背負い直し、レベリングを切り上げて、迷宮区を出る。
一週間で迷宮区のマッピングも7割近くは終わった。
早ければ明日、遅くても三日以内にはボス部屋を見つけられるだろう。
アークソフィアへ戻ると、キリトさんとアスナさんも戻って来ていた。
恐らく、二人もレベリングと迷宮区攻略の帰りだろう。
「キリトさん、アスナさん、お疲れ様です」
「おお、レインにシリカ。二人も、今終わったのか？」
「ええ。スキルも少しだけ上がりましたし」
「こっちもだ。もっとも全盛期にまで戻すにはまだまだ時間が掛かりそうだがな」
俺とキリトさんはレベルやスキルの話をする。
「あ、アスナさん。さっき迷宮区で変わった食材アイテムドロップしたんですよ」

「本当？私の方もいくつかドロップしたし、今日はこの食材で料理作ろうか」
「はい」
シリカとアスナさんは、料理スキルのスキル上げの話をしてる。
まぁ、この辺も男と女の差って感じだよな。
「お～い、キリト！それにアスナさんとレインに、シリカちゃん！」
すると、遠くからクラインさんが手を振ってやってくる。
その後ろにはアルブスもいた。
「クライン、どうしたんだ？」
「それがよ、面白い情報を聞いたんだ！なんでも、７６層の東の森で妖精と出会えるって話だ！」
「「「妖精？」」」
その情報に、俺たちは思わず声を出して、頭に疑問符を浮かべる。
「モンスターや異種族ＮＰＣって訳じゃないらしい。どうも今までのＮＰＣとは感じが違うらしい」
アルブスも腕組をして言う。
「何かのイベントか？ちなみに、その妖精ってどんな姿なんだ？」
「なんでも、金髪の長髪で、碧眼に、緑色の服を着てるって話だ。背中にも半透明の翅が

あるって話だ」
「クライン、それ本当か？俺が聞いた話だと、黒髪の長髪で、蝙蝠のような黒い半透明の翅って聞いたぞ？あと、服装も紫にって話だ」
「え？それマジか？」
　クラインさんとアルブスの情報に違いが現れ、俺たちはさらに考える。
「もしかしたら本当に何かのイベントかもな。それなら、姿形の違うＮＰＣが出てきてもおかしくはない」
「けど、今までのＮＰＣとは違うんですよね？」
「う～ん、ちょっと気になるな」
「ねぇ、キリト君。折角だしちょっと調べてみない？」
「レイン、私たちも調べない？」
　アスナさんとシリカに言われ、俺とキリトさんは、顔を見合わせる。
「そうだな。もしかしたらボス攻略に必要なイベントかもしれないし、調べる価値はあるな」
「ですね。それで、アルブス。他に情報はないか？東の森以外での目撃情報とか」
「ああ。俺が聞いた話だと、紫の妖精は東の森でよくモンスター相手と戦ってるらしい。戦闘音が聞こえる方に行けば、紫の妖精とは会えるかもな」

「緑の妖精はこれといって情報はねぇな。本当に東の森で会えるってのしかねぇぞ」
「それだけあれば十分さ。アスナ、レイン、シリカ、行こう」
頷きあい、俺たちはもう一度街を出る。
歩き出し、東の森に着くと、俺たちは二手に分かれて妖精の捜索を開始する。
「しかし、妖精か。エルフなら、第3層のキャンペーンクエストの時あってるけど、妖精は初めてだな」
「そう言えばそうだね。ここに来て、なんか一層ファンタジー感が増して来たよね」
「とにかく、今は妖精の捜索をしよう。案外、レアアイテムとかボス攻略に必要なキーイベントかもしれないしな」
「そうだね」
森の中を捜索していると、どこから戦闘音が聞こえてきた。
「戦闘音!」
「紫の妖精か!」
俺とシリカは走り出し、戦闘音がする方へ向かう。
その場所に向かうと、そこでは数体のモンスターに囲まれながらも、善戦している紫の妖精が居た。
「あの妖精……凄い……」

その光景に、俺はそうとしか言えなかった。
動きもそうだが、特に戦い方。
無駄がなく、全てが的確だった。
そして、動くたびに揺れる黒髪。
まるで宝石のように輝いていた
俺はその動きと、輝きに目を奪われていた。
「うわっ!?」
だが、妖精はモンスターの攻撃に足を取られ、転んでしまう。
その時、手にしていた剣を離してしまい、無防備になる。
その瞬間、俺は茂みから飛び出して、その妖精に攻撃しようとしていたモンスターの攻撃を受け止める。
「え!?き、君は……?」
「自己紹介は後回しだ!早く武器を拾って!」
「う、うん!」
その妖精は素早く武器を拾い直し、構える。
モンスターの攻撃を弾き、その妖精の隣に立つ形で武器を構え直す。
「もう!勝手に飛び出したりして!」

シリカも慌てて、俺の隣に立ち、短剣を抜く。
「悪い。でも、この人が襲われてるのを見たら、居ても立ってもいられなくてさ」
「分かってるよ。ひとまずは、この窮地を乗り越えなくちゃ！」
「ああ！頼むぞ、シリカ！妖精さんも、それでいいか？」
「うん！もちろんだよ！」
妖精は笑顔で頷く。
「よし、行くぞー！」

モンスターを倒し終え、一息入れてると、先程の妖精が興奮気味に近寄ってきた。
「君、凄いね！」
俺の手を掴み、ブンブンと振り回す。
「僕が知る限り、君以上の両手剣の使い手は知らないよ！それに、僕を助けようと飛び出して来た時なんか、凄くカッコよかった！ありがとうね！」
笑顔でそう言う妖精に、俺は思わず顔が赤くなった。
よく見たら、この妖精、女の子じゃん！
「わ、分かったから！ちょっと落ち着けって！てか手！手を放してくれ！」
「わっ！ごめん！僕つい興奮しちゃって、アハハ……」
妖精もとい彼女は困ったような笑みを浮かべて、手を離す。
「レイン……」
その時、後ろから掛けられた声に、思わず背筋が凍った。
「女の子に手を握られて、なにデレデレしちゃってるのさ！」
「し、してないって！ちょっと恥ずかしかっただけだよ！」

「本当に？」

シリカが疑いの目を向けてくる。

正直な話、手を離されたときは、ちょっと名残惜しかったです。

「本当だよ！それで……君、名前は？」

俺はシリカから目をそらしつつ、彼女に名を訪ねる。

「僕はユウキ！改めてだけど、さっきは助けてくれてありがとうね！」

落ちてくる少女

「ところで、ここってどこ？」
　妖精もといユウキがそう聞いてくる。
「どこって、７６層だけど」
「ななじゅうろくそう？」
「アインクラッドだよ。知らないのか？」
「あいんくらっど……ん～、そんな場所、ＡＬＯにあったっけ？」
「はっ？ここはＳＡＯだぞ？」
「え!?ＳＡＯってあのＳＡＯ!?死んだら現実でも本当に死ぬって言う、あのゲーム!?」
　どうも様子がおかしい。
「えっとユウキ……だったよね？とりあえず、色々聞きたいことがあるんだけど」
　シリカがユウキに近づいて、いくつか質問をする。
「ユウキさ、ＡＬＯって言ったよね？それって何なの？」
「ＶＲＭＭＯだよ。僕が今やってるゲーム」
「ＶＲって、まさか、現実じゃまだナーヴギアを販売してるのか？」

「ううん。今は、アミュスフィアって言うナーヴギアの後継機が出来ててるよ。ナーヴギアは、ＳＡＯの一件で全て回収されたから」
「じゃあ、ユウキもアミュスフィアでプレイしてるのか？」
「えっと……まぁ、そんな感じかな？」
　そこだけ誤魔化すような言い方にちょっと気になったが、余計な詮索はやめておこう。
　知られたくないこともあるだろうしな。
「それで、どうしてＳＡＯにいるんだ？」
「そう言えば、なんでだろうね？いつもみたいにＡＬＯをしようと思ってログインしたら、急にノイズのようなものが走ったんだ。そして、気が付いたらここにいてさ。僕も何が何だか」
「他のゲームから、ＳＡＯに来るなんてあり得るの？」
「どうだろうな……とりあえず、一度キリトさんたちと合流しよう。ユウキ、俺たちは街に帰るから、一緒に来てくれ」
「え？いいの？」
「いいもなにも、当たり前だろ？」
「でも、僕、皆と随分アバターが違うけど……」

そう言って、ユウキは自分の耳を指さす。
ユウキの耳は所謂エルフ耳で、この世界のプレイヤーとかけ離れている。
「そこは、シェイプチェンジのトラップに引っ掛かったとか誤魔化せばバレないだろう。ほら、体術スキルの獲得クエストでも、似たようなのがあっただろ？」
「あ、そっか」
シリカが納得したように手を打つ。
「と言う訳だから、そんなに気にしなくてもいいと思うぞ」
「う、うん……でも、本当にいいのかな？」
なんか妙に行きたがらないな。
遠慮してるのか？
「いいから行くぞ。それに、女の子一人置いて行く訳にも行かないしさ」
「ふぇっ!?」
「ん？どうした？」
「う、ううん！なんでも！」
「なら、行くぞ。逸れるなよ。取り合えず、シリカ、ユウキを頼む。俺は前に出て、道を確保するから」
そう言い、俺は二人の前を歩く。

（女の子扱い……初めてされた……）
（なんかレイン、この子に優しい気がする……）

何故か顔を赤くして無言のユウキと、俺をキツイ目で見てくる無言のシリカを連れて森を抜ける。
ちょうどキリトさんたちも出てきたところで、合流した。
「キリトさん、その人は？」
「噂の緑の妖精。それで、そっちは紫の妖精を見つけたのか？」
「ええ、まあ。妖精って言うより、プレイヤーでしたけど」

そう言って俺はユウキを見る。
「紹介します。ユウキです。なんでもＡＬＯって言う他のＭＭＯから来たみたいで」
「え!?ＡＬＯ!?」
すると、キリトさんの後ろにいた、緑の妖精が声を上げる。
「レイン、今、ＡＬＯって言ったか？」
「ええ、言いましたけど……まさか！」
「ああ、こっちも紹介しておこう。彼女はリーファ。同じくＡＬＯから来たプレイヤーだ」
「そう言えば、どことなく似たアバターですね」
「でも、どうしてＡＬＯのプレイヤーがＳＡＯに？」
「多分、ＡＬＯは、ＳＡＯと同じ基幹システムを使ってるんだと思う。アバターが引き継げているしな。だから、何らかの原因で、二つのゲームが混線して、ここに来てしまった。それが、俺の考えだ」
キリトさんの推測に納得し、ユウキを見る。
ユウキは、同じゲームから来たリーファさんと話をしている。
まぁ、同じ境遇の人間が居たら、安心するか。

「え!?リーファさんがキリトさんの妹!?」
「ああ。俺もビックリだよ。噂の妖精が妹だったなんて」
街に戻る途中、キリトさんからリーファさんの素性を聞かされ驚いた。
「私も、まさかＳＡＯの中に来るなんて思いもしなかったけどね」
リーファさんも、驚き具合としては同じらしく、困ったような笑みを浮かべ、頬を掻いている。
そうしてる内に、街の中に入る。
「うわー！奇麗な街だね！」

街に着くや否や、ユウキは辺りをきょろきょろと見渡し、燥いでいた。
「ねぇねぇ、レイン！ここ、なんて街なの？」
「《アークソフィア》。ここ７６層の主街区だよ」
「主街区って？」
「主街区ってのは――――」

シリカＳＩＤＥ
《アークソフィア》に着くと、ユウキは珍しいものを見るかのように燥ぎ、興奮していた。
その姿がなんだが子供ぽっくて、あたしは少し微笑ましくなった。
でも、レインの手を握る必要はないんじゃないかな？

レインも！ユウキに手を握られて、デレデレしちゃって！
ユウキは手を繋ぐことを何とも思ってないのか、それとも興奮のあまり気づいてないのか。
どちらにしろ、あたしの心の中は穏やかじゃない。
「あたし……恋人なのにな……」
あたしはそんな二人の後姿を見つめて、そう零した。
シリカＳＩＤＥ　ＥＮＤ

レインＳＩＤＥ
「ん？ねぇ、キリト君。あれ、何かな？」
ユウキに色々説明していると、リーファさんが上空を指さす。
「え？……なんだあれ？」
上を見上げると、上空に穴が開いていた。
と言うより、空間に急に穴が現れた感じだ。
「転移結晶による転移……じゃないよね？」
「ああ、発光の色が違う。それに、あんな上空に転移するなんて……」
キリトさんとアスナさんが上を見上げながらそう言う。

でも、俺は一度この光景を見ている。
シリカもだ。
その光景に、シリカも目を見開いて驚いてる。
そして、ユウナの時と同じように、誰かがその穴から落ちてきた。
「人が！」
「くっ！間に合え！」
キリトさんが走り出し、落ちてきた人を受け止めようとする。
あと僅かで、その人が地面に落ちる。
キリトさんは飛び込むように跳躍し、腕を伸ばす。
「おっと！」
だが、キリトさんの腕はその人を捕まえず、代わりに、偶然下を通りかかったアヤメさんが受け止めた。
「うわあああああっ!!」
キリトさんはそのまま勢いよく転び、そのまま地面を滑って止まる。
「キリト君!?」
「お兄ちゃん!?」
アスナさんとリーファさんが慌てて、キリトさんに駆け寄る。

「えっと……これはどういう状況だ？」
　アヤメさんはと言うと、落ちてきた人を抱えたまま、困惑していた。
「空から女の子が降ってくるシチュエーションを体験できるとは思わなったが、これも何かのバグか？」
「よくわからないんですけど……それより、アヤメさん。その人は大丈夫ですか？」
「ああ。大丈夫だろう。そもそも圏内じゃダメージは発生しないしな。それに、気を失ってるみたいだがら、精神的なショックもないだろう」
　そう言ってアヤメさんは腕の中にいる人を見る。
「とりあえず、宿屋に連れて行こう。そっちの、噂の妖精たちの話も聞きたいしな」

新たな仲間

空から落ちてきた女性を連れて、俺たちは７６層にある宿屋へと来た。
ちなみに、この宿屋はエギルさんの店で、買取なども請け負ってくれる。
現在、落ちてきた女性は、アヤメさんが借りてる部屋のベッドに寝かせている。
この部屋には、部屋の主のアヤメさん、そして、あの場にいた俺、シリカ、キリトさん、アスナさん、ユウキにリーファさん、そして、話を聞いて駆けつけてきたアルブスとリズさんがいる。
「それで、コイツは誰なんだ？」
アルブスが腕を組みながら、訪ねる。
「分からない。いきなり空から落ちてきたのを受け止めただけだからな」
「空からって、転移でもしてきたのかしら？」
「ううん、それは違うと思う。転移にしては発光の色が違ったし」
「あの～、それについてなんですけど」
俺はアスナさんの言葉に、口を挟み、話す。
「実は、前にもこういう経験を、俺とシリカはしてるんです」

「それは本当か？」
「はい。ユウナと出会った日、あの時と、状況が全く似てるんです」
「空に急に穴が開いたように、ユウナちゃんが落ちてきて……考えてみると、よく似てるんです」
「そうか……となると、彼女もユウナちゃんと同じ、《メディキュボイド》の使用者なのか？」
　キリトさんがそう言うと、隣にいたユウキが反応した。
「ユウキ？どうかしたのか？」
「え!?う、ううん！なんでもないよ！」
　誤魔化すように手を振って、否定するユウキに疑問を感じたが、今は些細なこととした頭の隅に追いやる。
「……ん……あれ？私……」
　すると、ベッドに横になっていた女性が目を覚まし、体を起こす。
「お、目が覚めたか？」
「!?」
　目を覚ましたその女性は、目の前のアヤメさんを見るなり、驚くように退いた。
「落ち着け。別に捕って食うつもりはない」

「……目が覚めて、目の前に知らない男が居たら、誰だって警戒するわよ」
女性は、キッと言う効果音が付きそうな眼差しで、アヤメさんを睨む。
「そりゃごもっとも。一応これでも、空から落ちてきたアンタを助けた恩人なんだがね」
「ま、圏内じゃダメージ判定はないから、ＨＰが減ることはないがな」
「あのねぇ、いくらダメージが無くても精神的なショックとかあるでしょ？本当に、アルブスってそう言う所がダメよね」
「うっ……悪かったよ……」
リズさんに怒られ、アルブスが申し訳なさそうに謝罪する。
「圏内……？ＨＰ……？なに？ゲームの話？」
その言葉に、全員が止る。
「てか、なんで貴方たち剣とか槍とか持ってるのよ？通報されるわよ？」
その言葉に、俺たちはある確信が持てた。
「なぁ、ここが何処かわかるか？」
「え？どこって……そう言えば、ここ何処？」
辺りを見渡し、訪ねてきた。
「７６層の《アークソフィア》だ」
「なんじゅう……ろくそう……？」

「アインクラッド。ソードアート・オンラインって言えばわかるか？」
「……なにそれ？」
その言葉に、また驚いた。
リーファさんやユウキも、ＳＡＯのことは知ってたし、デスゲームのことは知ってた。
少なくとも、現実じゃＳＡＯの事件は大々的に報道されてるはずだ。
なのに、知らない。
いくらなんでもおかしい。
「ねえ、まさかこの人、記憶喪失なんじゃ……」
リーファさんの言葉に、アスナさんが女性に近づく。
「ねえ、貴女の中で一番新しい記憶ってあるかしら？」
「えっと……思い出せない……自分でも信じられないけど、ここに来た経緯が分からないの……それ以前のことも、まるで頭の中に靄が掛かったようで……」
「えっと……とりあえず、聞け」
アヤメさんが、女性に位置から説明をした。
ＳＡＯのこと、デスゲームのこと、そして、７５層以下に降りられないこと。
「ここがゲームの世界だなんて……そんなの信じられるわけ……」
まぁ、いきなり言っても信じてはくれないか。

「右手を振ってみろ。こんな風にだ」
「……こう？」
　言われた通り、右手を振ってもらい、メニュー画面が出たらしく、驚いていた。
「これを見れば、ここがゲームの世界だって信じられるか？」
「……そうね。信じたくないけど、信じるしかなさそうね」
　女性は溜息を吐き、そう言う。
「それでだが、さっきも説明したが、今は７５層以下には降りることができない。つまり、お前はここ７６層に留まることしかできない。こんな上層に一人でいれば、確実に危険だ。そこでどうだ？俺たちと行動を共にするってのは？」
「貴方達と？」
　アヤメさんの提案に、女性が問い返す。
「ああ。少なくとも、一人で戦えるぐらいになるまでは俺達と一緒にいた方がいいと思うんだが。それに、女性プレイヤーの数も多い。男だらけのパーティーにいるよりは安心できると思うが、どうだ？」
「……そうね。この世界のこともよくわからないし、ひとまずは貴方達と一緒にいるわ」
「なら決まりだな。俺はアヤメだ。アンタの名前は？」

「朝田詩乃よ」
「それはリアルネームだろ？キャラネームが、メニュー画面にあるはずだが」
「キャラネーム……シノン？これかしら？」
「多分そうだろうな。じゃ、改めてよろしくな、シノン」
そう言って、アヤメさんはシノンさんに手を差し出す。
「……ええ、よろしく」
シノンさんもその手を握り返す。
こうして、俺たちは新たな仲間を迎え入れることになった。

７６層ボス戦

ユウキとリーファさん、シノンさんの三人が来て五日が経った。
現在、攻略のスピードは下がっており、迷宮区はまだ突破できていない。
それもそのはず。
攻略組の要と言うべき存在のキリトさんは、暫く攻略は休んでリーファさんの特訓に付き合っている。
リアルでも兄妹らしいから、教えるなら兄のキリトさんがいいだろうってことで、そうなった。
続いて、アヤメさんもシノンさんの特訓に付き合っているため、攻略を休んでいる。
アルブスも、暫くはリズさんのスキル上げの手伝いの為、攻略よりも鉱石アイテムの採掘をメインにしており、攻略はあまりしていない。
そして、俺もユウキの特訓に付き合っており、攻略を休んでいる。
自慢ではないが、俺は攻略組でもそれなりのハイレベルプレイヤーだと思っている。
それはキリトさんやアヤメさん、アルブスも同じで、たった四人とは言え、ハイレベルプレイヤーが抜ければ、それだけ攻略の進行度は下がる。

本当だったら、今頃７６層を突破できていたかもしれない。
「ちょっとレイン！また上の空になってるよ！」
「ああ、悪い。ちょっと考え事してた」
ユウキに怒られ、俺は頭を掻きつつ謝る。
「ほら！続き続き！」
今、俺とユウキは街の、人目につかない場所で対人戦の特訓をしている。
万が一と言うこともあるし、ある程度対人戦を想定した戦いを教えておこうと思ったが、正直驚いた。
ユウキは対人戦においてかなり強い。
対人戦に慣れているのかって聞いたら、ＡＬＯで辻斬りならぬ、辻デュエルをしていたらしく、対人戦は慣れっこなのだそうだ。
だが、それはＡＬＯでの対人戦であって、ＳＡＯの対人戦じゃない。
ＡＬＯではＨＰを全損させてもプレイヤーは本当には死なないが、ＳＡＯではＨＰを全損させたら死んでしまう。
だから、相手を殺さず制圧する戦い方を教えることになった。
「それじゃ、最初から今までのおさらいするぞ」
「うん！」

頷くと、ユウキは長剣を中段に構え、自然な半身の姿勢を取った。
俺も刀を構え、踏み込む準備をする。
両手剣を使わない理由は、刀のスキルも上げないと、俺のユニークスキルの《大太刀》が真価を発揮できないからだ。
そして、踏み込もうとしたその瞬間、路地に誰かがやってきた。
「おい、レイン！」
やってきたのはアルブスだった。
「アルブス、どうした？」
「攻略組からの報告だ！７６層のボス部屋が見つかった！」
「本当か!?」
「ああ！これから攻略会議だ！急いで来い！」
「分かった！ユウキ、そう言うことだから続きはまた後でな！」
「ちょっ！レイン!?」
ユウキをその場に残し、俺は急いで会議場所に向かった。

転移門前に向かうと、既に他の攻略組のプレイヤーたちも集まっており、全員が神妙

な面持ちでいた。
　そんな中、アスナさんが前に出て、話し出した。
「《血盟騎士団》のアスナです。これより、７６層ボス攻略会議を始めます」
　指揮はアスナさんが執るみたいだ。
「７４層、７５層と結晶アイテムが使えなかったことから、７６層、延いてはこれ以降の層も結晶アイテムが使えないと予想されます。そこで、回復アイテムはポーションを使用します。それと、各自一つずつ転移結晶を持ってください。ボス部屋に入り次第、結晶アイテムが使えるかの確認をし、もし使える様ならボスの行動パターンを見極め、その後、転移結晶で撤退。後日再挑戦します。もし、使えないようなら、苦しいですがそのまま攻略を続行します」
　アスナさんの言葉に、全員が頷き、不安そうな表情を浮かべ、覚悟を決める。
「それでは、攻略を開始します」
　その言葉を最後に、俺たちは迷宮区へと向かった。
　マップを頼りに迷宮区を進み、とうとうボス部屋の前に辿り着く。
「それでは皆さん。私から言うことは一つです。勝ちましょう。そして、生きて戻りましょう」
　その言葉に、全員が武器を握り直す。

そして、扉がゆっくりと開かれた。
部屋の中央に居たのは、巨大な目玉だった。
その目から生えている触手は、蛇のようになっており、まるでメデューサを彷彿させる出で立ちだった。
ボスの名前は《ガストレイゲイス》。
それを確認した直後、ボスは悲鳴の様な声を上げた。
「戦闘開始！」
その声を合図に、アスナさんが戦闘開始を宣言する。
タンク隊が隊列を組み、《威嚇（ハウル）》を使い、ボスを引き付ける。
その横から、俺達アタッカーが攻撃を仕掛ける。
２５層を始め、５０層、７５層はクォーターポイントと言うことで、通常のボスよりレベル設定が高い。
それと比べれば、今回のボスはまだやりやすい方だった。
攻撃も触手による叩きつけや薙ぎ払いなどで攻撃パターンも見切りやすく、全員が旨く回避や防御をしている。
三本あるＨＰバーの一本目を削りきる。
その瞬間、ボスの目が光りだし、動きが止る。

「まずい！散開しろ！」
キリトさんが何かに気づき、全員に呼びかける。
全員が慌てて散らばる。
その瞬間、ボスの目からレーザーが放たれ、直線状を焼き払った。
幸い回避が間に合い、死者はいなかった。
「ボスの目が光ると、レーザーが来る！威力はやばいが、攻撃の動作が分かりやすい！目が光ったら、奴の視線上に立つな！」
キリトさんの言葉に、全員が返事をし、戦いを再開する。
攻撃パターンを見破り、攻撃、防御、回避、そしてポーションによる回復にＨＰ管理、どれもうまく行ってる。
……うまく行き過ぎじゃないか？
「レイン、どうしたの？」
後ろから、ＨＰを回復させて戻ってきたシリカが声をかけてくる。
「いや、なんかうまく行き過ぎてるなって思ってさ」
「何か問題でもあるの？」
「そう言う訳じゃないけど、７５層のボスより弱いからって言っても、いくらなんでも攻撃パターンが単調すぎるし、奴の大技とも思えるレーザーも攻撃の動作が分かりやす過

ぎるからさ。ちょっと心配になっただけだよ……」
「言われてみれば、そうかも……」
「一応、アスナさんかキリトさんに相談してくる。シリカ、こっちは任せたぞ」
「うん、分かった」
シリカにその場を任せ、俺は前の方で指揮を執ってるアスナさんに声をかける。
「アスナさん！」
「レイン君！どうしたの？」
「今回のボスですけど、いくらなんでも攻撃が単調すぎるって思って」
「……そう言われると確かに」
アスナさんはそう言って、ボスの方を見る。
ボスはとうとう三本目のＨＰバーも削られ、あともう少しでラスト一本になる所だった。
「アスナ、俺もレインの意見に賛成だ。いくらなんでも攻撃が分かりやす過ぎる。ラスト一本になったら、一度前を引かせて様子を」
「三本目削り切ったぞ！」
「よし！残り一本！」
「このまま押し切るぞ！」

キリトさんの提案が終わる前に、とうとうボスのＨＰバーは残り一本となってしまった。

その直後、ボスは目を閉じ、そして開いた瞬間、強烈な光が起きた。

何事かと思ってると、ボスの目がまた光出し始めた。

「レーザー来るぞ！回避！」

キリトさんが大声で指示を出す。

「なっ!?か、体が！」

「動かない！」

「なんでだ!?」

ボスの放った強烈な光を前で受けた、殆どのプレイヤーがスタンになり、動けなくなった。

「まずい！スタンだ！」

「レーザーが！」

この事態に気づいた、タンク隊は慌てて、スタンして動けなくなったプレイヤーの前に出て、盾を構える。

しかし、視線上にいたタンク隊と、スタンしたプレイヤーはレーザーを直接くらい、そのまま部屋の隅まで吹き飛ばされる。

ＨＰは全損してはいないが、全員がレッドにまで落ち、殆ど虫の息だった。
「ＨＰがレッドにまで下がったプレイヤーはすぐに回復を！無事なものは、ボスに攻撃！ボスが目を閉じるとスタン攻撃の前兆！ボスが目を閉じたら、回避を！」
「だが、あの閃光は広範囲に効果がある！回避は難しいぞ！」
「背後なら食らわないだろうが、目を閉じてから開くまでの時間が短すぎる！」
アヤメとさんとアルブスが武器を構えつつ、叫ぶ。
どうすれば……
「部位破壊だ！」
すると、キリトさんが叫んだ。
「部位破壊で奴の目を破壊する！そうすれば、一時的だがレーザーとスタン攻撃は防げる！」
部位破壊とはフィールドボスやフロアボス、もしくは大型モンスターで、極稀に破壊できる部位があり、そこを破壊するとレアな素材や特殊攻撃と言った技を一時的に封じることができる。
だが、本当に極稀だ。
あのボスに、それも目の部分に部位破壊があるのかわからない。
「でも、キリト君！部位破壊は極稀にしかないし、仮に成功しても精々一分程度しか

……」

「だとしてもやるんだ！斬撃属性の武器持ちはボスの目に集中攻撃！」

キリトさんの言葉に、全員が頷き、一気に、片手剣や両手剣、刀と言った斬撃属性の高い武器持ちが一斉に目に攻撃をする。

ボスの触手攻撃を掻い潜り、目へと攻撃を繰り出す。

最後にキリトさんが《ローカス・ヘクセドレ》で七連撃を浴びせ、アルブスが《空閃一刀》でに真一文字に切り裂く。

「うおおおおおおおおお!!」

俺も両手剣を握りしめ、目に《ライトニング》を当てる。

ＨＰも半分近く減った。

だが、目の部位破壊にまでは至らなかった。

その時、ボスの目が光り出した。

「まずい！レーザーが来るぞ！」

「レイン！」

このままじゃ直撃する！

両手剣を引き戻し、防御態勢を取る。

「せやあああああ！」

すると、俺の脇をすり抜けるようにシリカが通り抜ける。
そして、手にした短剣をボスの目に突き立てる。
そのまま《ダーティーダンス》を繰り出し、七連撃がボスの目を切り裂く。
その直後、パキンッ!と言う音と、赤いライトエフェクトが現れ、ボスが悲鳴を上げる。
「部位破壊だ!」
「レーザーと閃光が封じられたぞ!」
「全員、全力でソードスキルによる攻撃開始!」
アスナさんの声を合図に、全員が一斉に走り出す。
そして、最後にキリトさんの一撃がボスにあたり、ボスが消滅する。
辺りが静寂に包まれ、その数秒後、獲得経験値と分配されたコルが表示された。
その瞬間、周りから溢れんばかりの歓声が響き渡った。
「ふう……」
勝てたことに安堵し、俺はその場に座り込む。
「レイン!大丈夫だった?」
シリカが短剣を鞘に戻し、駆け寄ってくる。
「ああ。シリカが守ってくれたお陰でな。守るつもりが、守られちまったな」

「何言ってるのさ。相棒なんだから、当たり前でしょ」
そう言って手を差し出してくるシリカの手を取り、立ち上がる。
「レイン、大丈夫だったか？」
アルブスも駆け寄ってきて、俺の安否を聞いてくる。
「ああ、シリカのお陰でな」
「そうか。このまま７７層に向かうらしい。お前たちも来るか？」
「いや、宿にユウナを待たせてるし、俺とシリカは帰るよ。悪いけど、後は頼むな」
「分かった。しっかり休めよ」
７７層に向かうアルブスを見送り、俺とシリカは７６層へと戻った。

《射撃》スキル

７６層を攻略し一週間が経過した。
攻略組も最初こそは動揺があったが、いまではその動揺も落ち着き、７６層にやってくる中層プレイヤーも居なくなったこともあって、攻略の進行速度も上がった。
そのお陰もあり、一週間の間に７７層をクリアし、７８層へと到達した。
「さて、シノンの奴はどうしてるかな……」
一緒に行動しようと言った手前、シノンのＳＡＯでの面倒は俺が見ているのだが、ここ最近は攻略を優先した為、シノンの相手をしてやれてない。
一応《Ｉｍｍｏｒｔａｌ　ｏｂｊｅｃｔ》の木に向かって短剣のソードスキルの反復練習をさせているが……
「おっ！やってるな」
いつもの練習場所に向かうと、そこではシノンが何度もソードスキルを木に当てていた。
「お疲れさん」
「ああ、アヤメ」

「調子はどうだ？」
「それなりにスキルが上がったわ。あと、ソードスキルを確実に撃てるぐらいにはなった所かしらね」
「ほぉ、この短期間でそこまで出来るようになるとはな。結構素質があるみたいだな。こりゃ、独り立ちも近いかもな」
　そう言って地面に座り込む。
「休憩にしようぜ。飯買って来たからよ」
「そう……ありがとう」
　若干俺との距離を開けて、シノンが隣に来る。
　買って来たサンドイッチと飲み物を渡し、食事を摂る。
「そう言えば、記憶の方はどうだ？」
「……まだ何も思い出せないわ」
「そうか……ま、気長にやって行けばいいさ。時間はたっぷりとあるんだからな」
「それより聞きたいことがあるんだけど」
「ん？」
　唐突な質問にシノンの方を見ると、シノンはステータス画面を開き、可視モードにして見せてくる。

「おいおい、自身のステータスはあまり他人に見せるもんじゃないぞ」
「そうなの？」
「そりゃ自分の情報がたっぷり入ってるからな。レベルやＨＰだけじゃない。スキルや所有アイテム、能力値。それらが他人に知られるってことはデュエルでも不利になるし、ＰＫ相手なら文字通り命取りだからな」
「アヤメは私にデュエルとか仕掛ける気あるの？」
「いや、無いけどよ……」
「ならいいじゃない。口で説明するより見せた方が早いでしょ」
　そう言ってシノンは半ば強引に、ステータス画面を見せてくる。
（ちょっと不用心じゃないか？）
　そう思いつつステータス画面を見る。
「ん？《精密動作》に《命中補正》？」
　聞いたことないスキルに俺は首を傾げた。
「その二つなんだけど、それってどう言うスキルなの？」
「……知らない」
「は？」
「こんなスキル、俺は知らない。そもそも、既存するスキルにも、こんなスキルは無いん

だよ」
　そう言いつつスキル一覧を見ていく。
　そして、俺の指はある一文を見て止まった。
「《射撃》だって？」
「え？なにそれ？」
　シノンが近寄りスキルを確認する。
「なにこれ？昨日見た時はこんなの無かったわよ」
「なら、今日の特訓で取得可能になったんだろう。てか、《射撃》って一体……」
「まさか……銃、とか？」
　少し声を震わせて、シノンが恐る恐る聞いてくる。
「いや、それはないと思う。ＳＡＯは剣の世界なんだ。その定義を壊す《銃》なんて代物、茅場が組み込むなんて考えられない。少なくとも茅場はそう言う人間だ」
　そう言ってしばらく考え込む。
　すると、隣でスキル習得の効果音が鳴る。
「ちょ、シノン！まさか習得したのか？」
「あ、いけなかった？」
「いや、そう言う訳じゃないがもしシステムエラーによるバグスキルとかだったら、何か

しらの異常が起きるかもしれなくてだな」
「ん～～～、特に体に異常はないわよ。それにステータス画面も変わりはないし」
異常や変化がないなら、ひとまず置いておくか。
それにしても……
「《射撃》か……投擲系の新スキルかもしれないな。シノン、ちょっと試しにこの投剣を投げてみてくれ」
投剣用のナイフを一本取り出し、シノンに渡す。
シノンは受け取ったナイフを木に向け投げる。
投げられたナイフはそのまま木に当たり、地面に落ちる。
「どうだった？」
「どうって言われても……別にって感じね」
「投擲系のスキルじゃない。とすれば……」
《ユニークスキル》
その単語が頭に浮かび上がった。
「どうしたの？」
「……いや、なんでもない。《射撃》スキルの詳細が分かるまで、この事は誰にも言わないでくれ。練習再開しよう」

そう言って練習を再開させる。

もし《射撃》が《ユニークスキル》だった場合、他の攻略組はシノンを放ってはおかないだろう。

ただ巻き込まれただけの人間を、デスゲームにに付き合わせるわけにはいかない。

そう思い、俺はシノンの練習を見守った。